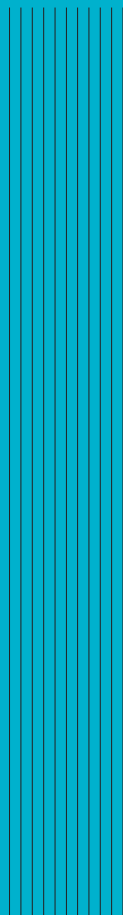




# 第Ⅱ章

2014.4.1-2018.3.31

思い・支え・つなぐ  
— どの道を選んでも“ふるさと富岡” —



# 1

## 生活再建 —— 避難指示解除からの“3つの道”

2017年4月1日、帰還困難区域を除いて避難指示が解除となり、役場は町内での業務を再開した。避難指示解除という政治的決定は、いわずもがな町民にも「帰還」についての判断を問うものだ。しかし長すぎた避難生活への対応や、何よりも避難の理由となった放射能汚染災害の性質から、解除だといって一概に判断できるものではなく、町民の生活再建の道はさらに複雑となる側面もあった。もとより、町民の将来については災害復興計画(第二次)検討の段階で十二分に認識され、その結果、計画書中最も多くのページを割いて町民一人ひとりの意向に即した取り組みを講じることとなったのだ。

その判断は「帰還する」「帰還しない」の2つに端的に分かれるが、災害復興計画(第二次)ではさらに「今は判断しない、判断できない」という第3の道を開き、待ち続け、さらには離れていても誇りを持って心のつながりを保ち続けられる“ふるさと富岡”の復興を目指すこととした。

“ふるさと富岡”の復興、そして町民の選択を「3つの道」に即して聞いた。

### 1. 帰還する (帰還した)

#### 長男にやれとは言えませんが 地域の農業をどうにかしたい

渡邊 達生さん (岩井戸)

高齢の母と一緒に郡山市へ逃げましたが、母はアパートで転んで動けなくなってしまい、市内のバリアフリーのマンションを見つけて入居しました。母は嫁いで約70年、自宅は農地に囲まれた環境なのですが、郡山では土のない、コンクリートだらけの生活。だんだんと食欲も落ち、体力もなくなり、平成25年に亡くなりました。

実家は生まれ育った自分の家だし、そこで帰ってこないという選択肢はありませんでした。家内に「郡山市に家を建てるという考えはないの?」と聞かれた時も、きっぱり「なし!」と返事しました。ずっと準備宿泊をして、いの一番に家を建て替えました。震災前に60才で勤務先の定年を迎えて、震災の頃は、女房にばかり任せないでもう少し家のことをやろう、そして地域にも貢献したい、と思っていた矢先だったのです。うちは自分で15代目の旧家。この歳になるとそういう重みも感じます。

自分が継ぐ期間は知れたものですが、帰ってきて改めてこの地に根を張らなくてはと思ったんです。

この地で代々農業をやってきたので、地域の農業をどうにかしたい、という思いで、いろいろやっています。

平成27年には町の農業再開に向け、様々な会議を開催しました。当初は、いわき市や郡山市から通って農業をやる、という人がほとんどだったので、大変でした。保全管理をして、農地にセイタカアワダチソウは二度と咲かせないようにしようと、約100名の組合員を集めてどうにかしようとしてきましたが、大変です。「町まで通って農業はできない」「健康上できない」「農機具は処分したので、今さら買ってまではできない」といった方々から委託を受けて、広範囲で保全管理をしてきましたが、それも来年度で終わりです。



再来年度から通常の営農となります。ただ高齢化も進み、笛吹けど踊らずで、この先農業をやろうという人はなかなかいません。

田畑の保全管理は、自分が出来る限り続けます。それは自分の田畑だけではありません。隣近所が草ボーボーでは、せいせいとした気持ちで田んぼ仕事ができせんから。田畑の道路沿いも図面とにらめっこしながら計画的にきれいにしています。

年に2回ぐらいは近所の人がお墓参りに帰ってきますが、その時に「何か田んぼや畑や道端がきれいになってるわね」という話が出て、俺がやってるんだぞ、とノドまで出掛かりましたけどね。そういう風に感じてもらえるのが嬉しいと思いました。一年放っておいたらもう草だらけになってダメです。田畑がイノシシの

巢にもなってしまうし、景観上、防災上も保全管理は大事です。

この先、自分も年をとるし、どうなるかは分からないけれども、身体と気力が続く限りやるつもりですよ。多くの人に自分の「後ろ姿」を見てもらえればと思っています。今年から年下の農業者3人が「先輩に自分の田畑を見てもらって申し訳ない」「自分の所は何か自分で保全管理します」と言ってくれて、やっていることに間違いはなかったと感じています。

田んぼの真ん中でトラクターを一人で動かしている時に、ふと「この地域はどうなるのかな?」と思うことがあります。でも強く決意してやっているの、まあ、何とかやっていますよ。

帰ってくる人と帰ってこない人の、どっちがいいか悪いかということはありませんが、今後の町の農業と商業は厳しいと感じています。東京にいる16代目の長男にもそれをやれとは言えません。町でいいビジョンを掲げても、人が戻ってこなければ

ばどうにもなりません。特効薬はないように思えます。帰還困難区域とそうでない地域との温度差もあるし、町内一円に同じ施策ができるという状況ではありません。これが厄介ですね。

避難している方々は、みんなそれぞれが考えて今の生活があるんだから、時間をかけていくしかないと思っています。

(2018秋談)

## 富岡川の漁業と風物詩を取り戻し 後に継いでいくために——

猪狩 弘道さん (王塚)

震災時は自宅にいました。自宅の隣に新宅があり、そこに長男夫婦が住んでいましたが今は離ればなれになりました。母屋を建て直して、2017年の11月に引き渡しとなり、私たち老夫婦だけが母屋に住んでいます。7代続いた家が途絶える状況になりましたが、私は、富岡川漁業組合長を長年務めるとともに、農業も営んでいます。町の農漁業を途絶えさせることのないよう、地域で頑張っています。

今、息子は52才。65才まで働いて農業を継ぐ、という考えでしたが、その思いが薄れてしまいました。全国的にもそうですが、富岡町もだんだんと後継者が少なくなり、原発事故がそれに拍車をかけました。自分も若かったらいいんだけど、いくらやってもあと10年です。これからの農業、漁業、そして林業も含めて歯車が変わってきている中で、自分ができる、残された時間はそれほど長くはありません。

漁業の面では、ヤマメ、イワナの再開は放射線量が今も200ベクレルぐらいあり、難しい状況です。福島

県では最低でも50ベクレルを下回らないと漁業権は発行されません。しかし平成

26年から鮎、イワナ、ヤマメの放流事業を再開しました。漁業権の発行は関係ない、とりあえず動かないと、組合員もだんだんと離れてしまうという危機感からでした。「あ、何かやっているな」ということが町の復興・復旧にもつながりますので、報道陣も呼びました。アピールして前に進まない、富岡町が忘れられてしまいますからね。風化しないようにと、平成26年からずっと継続してやっています。平成26年に放流した稚魚は4年後に戻ってきます。それが今年です。

「何でそんな一生懸命やっているんだ?」と周りには言われます。そんな時は「人間というのは何で生まれるんだ。仕事をやって皆に喜んでもらう。そういうことが大事なんだ」と答えます。そんな思いで我々組合員は動いています。しかし動くともそれだけお金もかかります。漁業権が発行されないから魚は売れま



せん。収入はゼロです。しかし何もしなくても河川が荒れ放題、草もボーボー……それはおかしい。業者に頼んでもお金はかかる、そこを我々漁業組合のみんなで草刈りをやるので、そのお金をくださいと町に掛け合せて、事業計画を立て、写真も提出して刈取りした何平米分のお金を頂くという公的な手段で、組合の運営維持費をまかなっています。

花いっぱい運動も進めていて、町民が帰ってきた時に「キレイだ。富岡町すごいね」と言われることがあります。「町と漁業組合がタイアップしてやってるんだよ」と話す「ああ、いいね。サケも上がって来てるべ」と言われる。そんな話をする昔の富岡町を思い出してもらえます。

ヤナ場に網をかける、という時は組合員、そして組合員以外の人も気持ちよく手伝ってくれます。一緒に川に入ってくれる、まちの仲間がいるからやっつけられるんです。いま新

しいヤナ場を作っており、2020年に完成します。それまでは私も組合長を続けます。組合員は現在48名ぐらいになっており、何とか漁業は目先が明るくなってきました。

問題は農業です。農地の保全管理は助成金でやっており、それが来年で終わりです。2020年以降をどうするかが問題になっています。私は

2020年には田んぼをつくると言っていますが家族は反対しています。今、まちの農地は300町歩ぐらい空いています。これを1年間荒らしてしまうと、今度は補助金もないし、誰もやる人がいなくなってしまいます。農家はもうトラクターも草刈り機もない。カントリーエレベーターも育苗施設も町にはない。それらをどうするかが今後、問題になりま

す。でも、私はいろいろな試行錯誤をやってみたい。新たにオリーブを70本ぐらい植えてみました。自由にやって自分で販路も見つけられればいくらでも出来ると思っています。楽しんで農業をやるのが大事。そんな姿を見せて、漁業と同じように後継者を増やしていきたいと思っています。

(2018.秋\_談)

## 「当初はだいぶ迷っていましたが」 「私は“とにかく帰る”の一念！」

猪狩 洋一さん  
悦子さん 夫妻 (本町)



洋一 震災発生時は、私は原子力発電所で働いていました。天井やクレーンが揺れて見え、死ぬかと思いました。地震が収まってから、現場はそのままして逃げました。現場をどうにかするという状況ではありませんでした。

悦子 私は孫たちと東京ディズニーランドに行っていました。その後、孫が小学校に入学するという事で、優先的に江戸川区の団地に入居してもらい、そこに6月頃までお世話になりました。

洋一 地震の後、家に帰ってくるのに大渋滞でした。家でも余震が怖かったので、車中で過ごしました。その後、転々としていわき市の一軒家を借りる事ができたのですが、先方の都合で退居する事になり、アパートに移りました。

悦子 アパートでの生活には、かなり気をつかいました。家財道具に囲まれるような狭さでしたが、当時はアパートを借りられるだけでありがたい状況でした。

洋一 1年前に家を建て直して戻りましたが、当初、戻るか戻らないかはだいぶ迷ってました。

悦子 いわき市で住宅も探しましたが、私はそのままいわき市で暮らす

のは絶対に嫌でした。自分一人でも帰るつもりで、復興住宅の申込書を取り寄せたりしていました。

洋一 いわきは、窓を開けるとすぐ隣の家だものな。

悦子 震災前は畑に囲まれていた生活でしたから、とにかく富岡に帰りたいという思いでした。男の人は生活でできればいいかもしれないけれど、女はご近所づきあいがあるから、それを新たに築いていくのは大変。自分たちもいずれ年老いて介護とかで近所に迷惑をかけたりお世話になることもあるでしょうから、やはり富岡町でなければ。

洋一 まあ確かにご先祖の土地だしね。更地にしたら「昔ここに家があったよね」と子や孫が思い出すだけになるよね。

悦子 私は「とにかく帰る」の一念、そのことでずいぶん主人とケンカしました。家に帰ってきて幸せです。社会福祉協議会の人に来て「何か不便とか寂しいと思うことはないですか」と聞いてくれていますが、「全然ない。帰ってきただけで幸せです」と答えましたよ。

洋一 ここは元々一軒一軒が離れて

いるから、隣同士でうんぬんという付き合いはないからね。組内で4～5軒ぐらいは帰ってきてるかな。

悦子 戻っている人は少ないけれど、全然気になりません。きっといつの日にか皆さん帰ってきてくれると思っています。

洋一 ただ年数が過ぎると向こうの避難先で落ち着いちゃうんだよね。帰ってきているのは、我々のような年代ばかりですよ。

悦子 自宅での生活は最高よ。ラジオ体操でもジャンプできる(笑)。ここに戻ったばかりの頃、後片付けをしていて、何故かそーっと動いている自分に気づいて思わず笑ってしまいました。もうそんな気づかいは必要ないのに。

洋一 でも子どもの声が聞こえないのが寂しいね。

悦子 若い人には帰ってきてほしいですよ。私たちは何とか生きていけるから、富岡町として一人でも多くの若い人たちが戻れるような行政の施策をお願いしたいですね。

(2018.秋\_談)



## 自給自足の覚悟を持って 高齢者共同の生き方を実現？

堀本 和枝さん（上本町）



避難で転々として、いわき市に戻り、空き家を2軒ぐらい移り、これはもう子どもたちがきても居場所がない、家に残したままになっていたばあちゃんの仏壇も持ってこなくてはこの小川地区に家をつくり、いったん落ち着いていました。

役場が町に戻ったあと、この地域の仲間の人たちも帰って来てるので「俺たちも行かなければな。仕事もあるし」とお父さんが言うので、そうだねということで帰ってきました。除染して、木を切ったりまわりをさっぱりとして、家を急いで建て、引っ越して、まだ1か月ちょっとぐらいです。この辺りは、大概のところが帰ってきているのです。

この土地をね、ご先祖様から頂いた土地を気安くね、手放すわけにはいかないとお父さんは言っている。だから、何かをせねば——と。黙ってくすぶっているだけではだめですからね。

でも、お年寄りばかり集まってもだめだから、その何かの一步、その一步が前進というのが、まだはっきりしないんですね。何かしなくてはいけないという気持ちがワクワクと湧いてきてはいるけど、こう思っっては、いやどうしよう、あれどうしようっ……て。これからあと何年かしたら税金は来るわ、固定資産税は来るわ……。そんなのはどうするんだい、とかね。

私たちが何かやるっていても、微々たるものですよ。だから、そういう面ではちょっと困ってしまうなということです。だんだん年を取っていくから早くしなくてはと、気はもめるのですけど。

子どもたちはみんなバラバラになって、相馬、千葉、いわき、三春と。

孫たちのところへは、私が行ったり来たりしている。子どもたちはみんな孫主体になってしまいますよね、住む場所は。だから、一堂に集まると言ってもそうそう機会がなく、ここが実家ということになるのだけどね、みんなバラバラで、いやいやって思ってしまうから。

だから、これからの私たちの時代は、子どもに世話にならず、われわれの生き方を貫いていくということをお父さんと話しているのね。どちらかが欠ければ施設という話になっている。ただその施設を、こういうわれわれが居やすいような場所をこれから築いていかなければいけないのではないかと思います。これは、町長もそうですけど議員さんも、みんなでやって欲しいなと思います。

千葉に行くともう廃校になった学校があり、そこが野菜を産直でね、野菜を売ったりとか泊まれるような施設だったりするのです。テレビでもそういう廃校になったところの活用を紹介しているじゃないですか。富岡にもあんなちゃんとした学校があるのは一番の魅力。あそこを何とかすればいいのではないかな。そこで私たちも、野菜を作ったり何かして産直で安くね、新しいものを売ったりとか、ランチタイムとかやったりすれば、どんどんとぎわうのではないかな。

シェアハウスでもいいですよ。サロンに行ってみると「シェアハウス作る人いないかな。そうすれば行くのだけ」と言っている人がいます。同じことを考えている人がいる。そういう考えを持ってくれる人

たちが集まり、自給自足で、我々是我々で生きていくのだというような(笑)。川内とか双葉とかのそういう人たちも行き来できるようにすれば、人に頼らず、我々是我々という自給自足の時代がくるかもしれない。私らの代はまだ車の運転もできるから、お医者さんに行きたいと言えば一緒に行ったり、「おばあちゃん、元気？ 朝だよ！」とか顔見せながら、施設に入らなくてもやっていけるようなところ、あったらいいなあってずっと考えています。そうやって楽しく余生を送ることができるところ——。

若い人たちはね、線量は低い低いと言っても高いところもあるし、地団駄踏んでいる部分もあると思いますから、そういう部分はちょっと置いておいてあげないと可哀想です。

でもうちの男の人たちは、若い人たちが住めるような地盤をつくるというような大きなことを言っています。農業などは特に、若い人たちがいないと後が続きませんから。私も大学生などに「今の農業はおばさんたちがやったときと違い何でも機械だから、何にも汚れることもなくできるのよ。まあ、そんなに楽ではないかもしれないけど、百姓もちょっとは魅力があるわよ」と話したりしています。「大変な時はみんな助け合う、私らはそのような結(ゆい)でやってた。そうすると作業が終わってから今度はバーベキューやったり、それを楽しみに頑張れるの」と。

(2018秋談)

## 一からやり直す気持ちで 荒れた農地と向き合う

林 秀樹さん（下千里）

震災が起きた日は夜から明け方まで、消防団として炊き出しなどの手伝いを役場で行いました。翌朝、テレビを見たり大熊町の防災無線を聞いたりして、チェルノブイリのように何十年も帰ってこれなくなるかもしれないと思い、必要なものをすべて車に載せて川内村へ避難しました。朝9時ごろに富岡町を出て、ようやく川内村へ着いたのは正午少し前。川内村の誘導で小学校へ向かいましたが、避難所はすでにいっぱいでした。自分は消防団に所属していたこともあり、避難した町民のお世話をすることになり、その後いわなの郷に行き炊き出しの手伝いなどを行いました。そうしているうちに、第一原発の1号機、3号機が、続いて4号機も爆発した時さらに避難した方がいいということになり、役場が川内村と一緒に郡山市のビッグパレットへ向かい避難生活を送りました。

震災から数ヶ月後、自宅付近の放射線量を測ったところ、4マイクロシーベルトそこらでした。もう少し離れるとこの辺よりも少し高くなるんですが、この辺は風が通り抜けて

いくせいか低くて、もしかするとここは帰ってこられる場所なんじゃないかなと思いました。

ビッグパレットを出てからは、借上げ住宅として郡山市内のアパートに住み始めました。震災前は夜に郡山の街なかにいるなんてあり得えませんでした。震災後の夜中に郡山の街なかで「あれ、こんな時間何で自分はここにいるんだろう」と、思ったこともありました。

2017年4月に避難指示が解除となつてから消防団も臨時職員も辞めて、町から委託を受け地区内の農地の保全管理に力を注いでいます。除染して一見震災前の状態に戻ったように見える農地も、草刈りや耕運作業を行わないと農業を再開できません。地区の仲間たち3人と町の復興組合に所属し、圃場の維持に汗を流しています。

農地保全を始めてから、富岡へは郡山から通っていましたが、今年(2018)は新たに農業機械を揃え試験的に稲作を再開したので、その作業に応じて富岡の自宅に泊まることもありました。試験栽培では、県で売り出し中の「天のつぶ」を作付しまし

たが、今までないぐらいの高収量でした。放射性物質は不検出で、販売することができました。現在の作付面積は0.7ヘクタールで、東京ドームの6分の1ぐらいです。震災前は4ヘクタールで栽培していましたから、来年は作付けをもっと増やしたいところですが、田んぼを元の状態に戻せるかどうか。除染でできたでこぼこは、耕運機で掘り返しても直らないので、地道に平らにするしかありません。現在の富岡町は、条件の整った開拓地…とでも言えばいいのでしょうか。先祖がひたすら根っこを掘り荒地を開墾した時のように、荒れてしまった農地と向き合い、一からやり直している心境です。

1994年頃に建てた自宅は、築25年ぐらい。震災で瓦が落ちたり、雨漏りしたりしました。富岡に帰ると決めてから新築にするか悩みましたが、外構なども含めてリフォームすることを決断しました。周りには帰還している人たちもいます。リフォームも一通り終わり、自宅の整備が終わったので、近々富岡へ帰りたいと思っています。

(2018秋\_談)

## 2. 帰還しない（帰還できない）

避難5年目に避難先で家業を再開  
雪のある暮らしにも慣れて

石原 政人さん（中央）



震災が起きた翌日に川内村へ避難しました。福島第一原発で2回目の爆発が起きた頃に、新潟県柏崎市に住んでいた妻のお姉さんから「原発が危ないからこちらにおいで」という連絡があり避難してきました。その後空いていた一軒家がたまたま見つかり、そこに4か月ほどいました。借上げ住宅制度が始まるのに合わせて、近くのアパートに引っ越して2年8か月ほど住んでいましたが、2016年2月に自宅と事務所をこちらに建てました。

柏崎で営業を再開してからは、福島、山形、青森といった震災前からの営業エリアに、福井、石川、富山、長野、新潟も加えて、大手ミシンメーカーの卸売り業者として販売・修理などを行っています。家庭用ミシンを修理する場合は宅配便で事務所宛に送られてきますが、大きい業務用ミシンは宅配業者が集荷しないため、出張修理しています。知らない土地に店を構えたので、お客さまに信頼していただけるように試験勉強して、「一級縫製機械整備技能師」という国家資格を取得しました。田舎の柏崎はお客さまの数が少なく、当店の知名度も低いので、商品開発などにも挑戦しています。なかなか大変ですが、福島県内は同業者が多く競争が激しいので、ここ柏崎で頑張るしかありません。

震災当時は、子どもたちが小学生と高校生だったので、なるべく危険の少ないところに避難しようと思いましたが、富岡町は、今も国際人権団体から、こんなに放射能の高いところに女性や子どもを戻していると批判されています。国は避難指示基準を、年間1ミリシーベルトから年

間20ミリシーベルトまで引き上げました。安全の基準というのがよく分かりません。

年間20ミリシーベルトという数値も原発に作業員を送り込むための都合のいい数値に思えてしまいます。

富岡町へ帰らないと決めるまでは悩んでいましたが、仕事と家族とどちらをとってもやはり戻るのは厳しいのが実状です。富岡町の家はもう住むことはできません。仮に戻ってアパートや家を新しくして住んだとしても、お客さまがいないから仕事になりません。富岡にいた時は、双葉郡全体にお客さまがいましたが、今はそこに人がほとんどいないのですから仕方ありません。富岡町から比較的近くにあるいわき市にという選択肢もありますが、いわき市は福島県内でも同業者が最も多いエリア。郡山市は同業者はいないので、私に土地勘がないので仕事がしにくい。

田舎は人と人のつながりが大きく、人が人を連れてきてくれます。店はオープンして2年目ですが、少しずつお客さまが増えてきています。この業界はラーメン屋とは違い、おいしいから行列ができるようなことはありません。大都市だからと言って売れるかということ、そうでもありません。大都市では、お客さまは知名度の高い大手に流れてしまいます。

子どもたちが成長した時に働き口がなくて、家族がバラバラになってしまうことも避けたいという思いもありました。富岡へ戻るとなると、息子が高校に入る前とか、早めに戻らないといけません。柏崎に来て2

年ぐらいで、子どもたちの将来を優先して考え、富岡へは戻らないと決めました。3人いる子どものうち、24歳の長女は今年結婚しました。23歳の次女は美容師として柏崎市内で働いています。長男は19歳で地元の新潟工科大学へ通っています。次女の仕事を先も見つかったし、長男は学びたい大学へ進学したし、長女も結婚するまでは家から仕事先へと通っていました。富岡町へ戻ったとしても同じ様にはいきません。

それまで悩んでいた分、帰らないと決めたことで精神的に楽になりました。故郷に戻れないというのはつらいことですが、故郷への思いだけでは生活できないのも現実です。私のすべての原点は、今も変わらず富岡町にあります。生まれも育ちもずっと富岡町で、お祭りなどにもずっと携わってきましたから、富岡町に対する思いは人一倍強いのですが、戻れないのはしょうがないという気持ちです。

富岡は冬でも雪が降ることはほとんどありませんが、柏崎では除雪機が必要になるような「どか雪」が降る時もあります。除雪したそばから雪が降り積もることもあります。冬は湿度が高くどんよとした日が続きますが、その分温かく乾燥することがないので、加湿器ではなく除湿器が欲しくなります。当初は戸惑うこともありましたが、富岡とは大きく異なる気候にもだいぶ慣れてきました。

先月、学びの森から手芸の講習会



と商品販売の依頼をいただき、夫婦で参加してきました。以前のお客様や知り合い、また町外の人たちとも会えてよかったです。12月も参加することになっていて楽しみにしています。今年度だけでなく来年度も開

催されるとうれしいイベントです。富岡町との関わりはなくなるわけではありませんが、柏崎にいる私にとって“ふるさと”は遠きにありて思うもの”になってしまいました。ヤマダヤを半世紀以上営んで来られた

のは、地元の皆さんのおかげです。当店をご愛顧いただいたお客様に心より感謝申し上げます。今まで本当にありがとうございました。

(2018.秋談)

## 富岡はいいなあって思ってる でもやっぱり戻れない…

鳴原みち子さん (中央)

川内に避難したその日のうちに田村郡の三春中学校へ。そこから栃木、群馬、牛久、土浦と転々として、その年の10月末、いわきのアパートに入りました。でも3年ぐらい経って、おじいちゃんが「もう、ここで俺は死にたくない。アパートでは死にたくないからどこか、土地探して自分の家を求めたい」って。2LDKに私たち夫婦と、おじいちゃん、おばあちゃんと、それから息子たちと6人で住んで、もうギュウギュウだったので「もういやだ」って。本当に急いで、郷ヶ丘に土地を求めて家を建てました。

そこからおじいちゃんも少しずつ、庭をやったり何だりで元気が出てきて、ああ、よかったあとで現在に至ります。富岡の家はおじいちゃんたちが一生懸命働いて、借家だったところから、土地を買って、建てたところだから、本当は富岡に帰りたかったんだろうけど、4年前はまだ帰れる目途がはっきりしていませんでしたから。

そして今度、長男が結婚して、孫ができて、一緒にいるので、子どもの学校をどうするかという話。4歳と2歳の男の孫がいるんですけど、お嫁さんはやはり不安もあってなかなかね。私たちは、戻ってもいいかなってふと思うこともあるんですけど、やっぱりそういう関係から戻れないなあと。今ちょっと落ち着いて

いる時です。

ひ孫はね、おじいちゃんおばあちゃんの起爆剤なの。もう頑張るし、ほけないし、何か作ってあげなくちゃって頑張ってるものづくりしている。だからすごく助かっているんです。次男坊も近くのアパートにいてまた別に孫もいるし、娘も近くにいて一番大きいひ孫、11歳がいる。それが頼りでおばあちゃんも頑張っています。しかも一番近くに生まれたひ孫が自分と同じ誕生日だったものだからおばあちゃんはすごく喜んで、あと2回か3回は絶対迎えるからといって頑張るし、とても助かっています。

元気なのが一番ですから本当にうれしく思っています。だから帰らないと決めたというか……。

私の仕事は、2012年の11月からかな、こういう仕事があるからどうですかって声をかけてもらって応募して、交流サロンに勤めさせていただいています。サロンにおいでになる方も、最初は誰かの顔を見たくて、会いたくて来ていたのが、今はだいぶ落ち着いて、自分で家を建てたとか、富岡に戻ったという話をされます。いわきから帰って行った人とかいろいろいますが、結局さみしくて富岡といわきを行ったり来たりしてるとか、今は運転できるけど年齢的に運転できなくなったらどっちに行



こう、といった話もされます。ここに家を建てたのに、結局はそれを売って富岡に戻った方もいます、向こうにもう一度家を建てて…。夫婦二人で戻っていらっしゃる。

まだ若いから、といっても74か75の方で、今は歩けるから自分から出かけて行って話すんだといってさくらモールとか、交流サロンとかに行ったりしているようです。婦人会の活動をしたりもともと活発な方なのですが、今は元気だからいいんですけど、先はやはり不安のようです。息子さんたちはみんないわきに住んでいますので。昼間は誰も来ないって。夜ももちろん来ないって。(笑)

何て言うのか、モヤモヤは残っているんです。私も、学生のときと勤めとで4年間だけは富岡を離れましたが、あとはずっと富岡。だから富岡は好きですし、ずっと忘れることはない。けれども現状では戻れない。主人は富岡消防のパトロール隊で毎日富岡に行っていて、富岡はいいなあと思っている。でもやっぱり戻れない、おじいちゃんおばあちゃんもいるから、と思っている。「本当はこういう仕事をしている人は「帰れない」とか言ってはならないんだ」って言われたことがあるんです。帰り



たくて帰った人に失礼だからと…。でも私の本音としては、「帰りたけれど、いまは帰れない」って言うしかないんですよ。孫たちがあと2年後に学校に入るときに、町としてもそろそろ住所を選択して欲し

い、ということになるんじゃないのかな。いま住んでいるところなのか、富岡か。

私たちはもう、どっちでもいいんですけど、子どもをこれから学校に上げる人たちはたぶん考えると思う

んですよ。学校に行ったときにどこかで何か不具合が起きることがあるかもしれないと、それを考えるとね。町としてまだ軌道に乗ってないから、その不安があるうちは——。  
(2018秋\_談)

## 子ども家族を中心に生活再建 富岡に夢みた老後かなわず…

青山 聖さん (大菅)

元の家は帰還困難区域。あと4年でなんとか——と町は言っていますが、やっぱり一つは、お医者さん。われわれ若くないんですよ。これからどんどん年取ってくると、お医者さんの関係もあるわけですね。

あと、子ども夫婦と一緒にいて、孫も2人いる。その関係もあって帰れないと決めた。家を新築してしまっただけです。

私は避難でも、あまり苦労はしませんでした。川内では妹たち、そして三春にある親戚のところ、いわきの妻の実家、そしてアパートに移り、家族6人揃って過ごしていました。しかし狭かったのが、土地だけでもということでこの場所を見つけ、ひとまず買っておいただけです。避難2年目のことでしたので、まだ安かったんですね。

そうしているうち、孫も勤め始めたものだから、やはり家を建てようという話になった。その頃になるともう建設会社が順番待ちの状態、1年ぐらい待って、建ったのが3年前ですね。

富岡の家は壊れてはいなかったんだけど、7年もそのままにしておいたので、ぐし(棟)が何本か落ちて雨漏りしてしまったんですね。ネズミやらイノシシやら、泥棒にも入られたり、もうなんともしようがないということで、解体申請しました。

私は若い頃はいわきでサラリー

マンをしていました。結婚して、子どもが2人。で、営業で行っていた双葉の方で、今の第二原発ができ始めた頃に、そこで商売をやっていた人が辞めるという話があり、自分もまだ若いし、東電ができるのであればその権利を継いでやれそうかなと考えました。それで会社を辞めて、富岡に行ったんです。

借家住まいでしたが、山林だった所をならして土地を売るということになった時に、買っておいだ。富岡に移って3、4年目の頃でしたから、やっぱり安かったですね。そのうち娘が大きくなって、借家から嫁に出すのもかわいそうだということで、家を建てました。

そうして、娘らも結婚したし、店じまいしてのんびりしようとしていた矢先の震災、原発事故避難でした。それまでは、まわりにはいい人ばかりでしたから、夕方になるとね「ちょっと隣に行ってくるから」って行って、晩酌やってきたりね。それがなくなっちゃった。ここでもお付き合いはしていますよ。でも、富岡にいるときみたいに「晩酌やっかい？」なんてわけにはいかないですね(笑)。

私、生まれは川内。女房は平。でも40年住めばふるさとですよ。富岡だけは目をつぶっても歩けるか



ら。行ったばかりの頃は、花見なんかで酒を飲んでのけんかなどよくありました。いま、廃炉とかなんかに来ている人たち、これから先30年かかるでしょうから、けんかがあった頃のようなことにだけはしたくないと思ってしまいます。その後ずっと、みんなでまちづくりをして、さくら富岡にしてきたわけです。帰還だ、復興だといっても、人の数だけではどうしようもないと思います。やっぱり、そのへんからきちんとしていかないと、また40年前みたいなことになってしまうのかも…とつい心配してしまいます。

役場が富岡に戻って、賑わいが戻ってきているところですね。あっちへ行って知り合いに会ったりなんかするとね、みんな一生懸命やっているなという思いもあって、よく整えば帰りたいなという思いは、頭の隅にはあるんですね。いま一生懸命、町をどうしようにするかというのをやっているんでしょうからね。その最初の土台から作っていかないといけないのかな、と思います。昔の富岡にしてもらいたいというのは、震災前のいい富岡にしてもらいたい、ということです。

(2018冬\_談)

### 3. 今は判断できない、判断しない(迷っている)

#### 跡取りの息子には「帰ってくるな」 心は絶対、富岡町から離れない…

猪狩 俊幸さん (高津戸)



家は農家だったので、勤めながら片手間に農業をしていましたが、定年退職を機に本格的に農業を始めました。実は二男が平成23年の3月に勤めていた仙台の会社を辞めて、4月に富岡町の実家に戻り跡を継ぐ予定でした。その矢先の震災でした。

二男はまだアパートを借りていたので、その後3年ぐらいは私もそこにいました。津波で沿岸部の勤務先もなくなってしまい、今後どうするかとなった時、私は「家を継ぐのもうダメだ、富岡町に戻ることができないから。今後、自分たちの生活は自分たちで立てなさい」と話しました。いま二男は関東地方で暮らしています。

いま長男と福島市に二世帯の住宅を建てて暮らしていますが、私は年を重ねてから富岡町で家を建て直して帰っている人々を思うと尊敬します。だって自分たちの子どもが帰ってくるかどうか分からないわけでしょう。そういう中で「帰る」と決断した人を本当に尊敬しています。

ただ、これからの富岡町を、帰った人に託すかという、それは非常に困難な考えだと思います。いま帰還している人たちの相当数が高齢者、学童は少ししかいません。子育てが終わった、子どもが大きくなった、だから富岡町に帰るんだ、という方が残念ながら多数を占めています。しかし、新しい富岡町をつくっていく上で、新しい世代、新しい考え、新しい人たちを入れていかないと、これからの富岡町は成り立っていきません。

双葉郡全体の社会的な構成、枠組みを変えるぐらい、住民の意識を変えていかなければならないのかもしれない

れません。いま外部の人を入れてまちづくりを進めることも検討されていますが、まちづくりというのは5年や10年ではなく、基本的には何十年という時の流れの中で、そこで生まれた人がその子どもたちに残していくという、世代をつないでいくことが柱であるべきです。ですから、ちょっと富岡町に来てみました、という人ではなく、富岡町に永住する、骨を埋めるんだ、という人を町として最大限に歓待して、フォローすることは必要です。来る人、迎える側にその覚悟が必要なんです。

じゃあ離れた土地にいる私たちは何ができるかという、この年になってしまったので、何とか富岡町が荒らされないように、次の世代に引き継ぐことなんです。心は絶対、富岡町から離れません。町内にアパートを借りていて、活動の拠点を設けています。自分は農家ですから、田畑の維持管理をしています。また、共同で結構な面積を預かって荒らされないようにしています。

また、自分は富岡川のサケ漁に携わっています。川に関わっていると、春先に鮎の稚魚が上がってきて、6月7月に鮎の放流があって、鮎釣りがあって、その間に山の方でヤマメ釣りがあって、10月からはサケが上がってきて、漁をして……と、1年間のサイクルがあるんです。農業も同じです。自然に関わっている人というのは、四季を感じながら、土地の良さを感じながら、自分の身体で1年間という年月を自分なりに回しているんです。

だから、本来、復興というのものも、

地域の特性を生かして進めなければならぬのですが、実際は太陽光を導入しました、産業団地も進めました、といったことが先行してしまっ、じゃあ富岡らしさって何だろう、と考えた時に、やはりある程度考えて、富岡町ならではの「基本的な視点」というものはあってしかるべきだと思います。

私個人的には、次の世代の人たちにいかにバトンをつないでいくかという現在の活動を、ずっと続けていきたいと思っています。

あとは、両親が眠っているお墓を、今までの世代が続いてきた「時の番人」として管理すること。その後は子どもたちの考えだと思っています。本当は次男という、次の「時の番人」も見つけたつもりでしたが、苦渋の決断で「帰ってくるな」と、追い出しました…。この気持ちは誰にも分からないと思います。

私の1年間の生活は、富岡町と福島の家と半々ぐらいです。戻るかどうかという点については、まだ迷っています。今の判断が良かったかどうか、きっと、死ぬまでずっと悩むと思います。

(2018.秋\_談)





新夜ノ森上空から遠く阿武隈山系を望む



## 広報とみおか 桜通信 [抄]



面川 岩海さん (夜の森駅前北)  
[平成27年6月号]

### 故郷と避難先の両方を大切にしていきます

大地震が起きたとき、私は地区の集会場で行政区役員の皆さんと広報紙をはじめとする役場からの配布物を仕分けする作業を行っていました。すぐに作業を中断し、私は民生委員を務めていたため、受け持ちの要支援者世帯の巡回を始めました。余震が続く中、お年寄りや障がいをお持ちの方は、私たち以上に不安を感じており、無事を確認して次の巡回先に向かおうとすると「(地震が)怖いから帰らないでくれ」と引き留められ、手際よく巡回を進めることができませんでした。

被災翌日の早朝、水汲みと米を洗いに杉内地区の川に向かい、自宅に戻ろうとしたところ、市街地方面からの車が列をなし、夜の森方面に向かう私は警察官に制止さ

れました。仕方なく、川で洗った米を見せて事情を説明し帰宅しました。その後は、家族と共に町を離れ、川内村、いわき市の親類宅や借上げ住宅を経て、昨年8月、住宅の完成に伴い現在の地で暮らしています。

いわき市での生活を始めた頃、仮設住宅と借上げ住宅で情報格差があるなどの問題がありました。また、地域の皆さんとの交流も課題でした。避難している町民同士のネットワークづくりが必要と考え、平成23年5月、いわき地区広域自治会「さくらの会」を発足させ、初代会長を務めさせていただきました。発足にあたっては会員集めや規約、組織づくりなどを行い、いわき市を駆けずり回る日々でした。

私は引き続き町の民生委員を務めています。超長期避難という特殊な環境の中ですが、一人でも多くの方が少しでも前向きな生活を送れるよう努力していくつもりです。また、平成27年4月から夜の森駅前北行政区長となりました。いわき市内で総会を開催し、県内外各地から多くの皆さんにご参加いただきました。今後、故郷に帰還するしないに関係なく、夜の森駅前北行政区に自宅を持つ住民同士の固い絆と横の連帯を強化してまいりたいと思います。



## 2

## 富岡町小中学校「富岡校」 開校へ

2017年3月、役場は町内での業務を再開。それはいわば町そのものの再開であり、町民が町民として安心して生活することができる条件がひとつおり整ったとの判断があった。ライフラインをはじめ、最大要件としての除染状況、そして災害公営住宅、病院、買い物環境など、日常生活および経済・生産活動を支える公共・公益施設。しかし、学校の開校は翌2018年の4月とされた。

「学校再開を町民の皆さんに伝えるためには、学級編制などさまざまな手続き上、遅くとも前の年の10月には準備を始めていなければなりません。しかし、町の帰町宣言が出る前にはその問い合わせもできないため、教育委員会として学校再開は2018年4月1日にしようということで、準備に入りました。

手続きという意味では、一番の問題として子どもが戻って学ぶことができる環境かどうかを、保護者など関係者みんなで現地確認する必要があるだろうということも話し合っていましたから、1年遅らせることは妥当だろうと思いました。一番大きな放射線量の問題は、保護者の方々も一番心配されますから、しっかり除染し、確認し、これだけの環境が整いましたよ、という呼び掛けができるような体制づくりを1年間やったということです。」

(富岡町教育委員会・石井賢一教育長)

その学校再開準備のためには、帰町して就学するだろう子どもの数を把握することも含まれる。このことから、教育委員会は町と一つの基本姿勢を確認し合っていた。

「あくまでも“町民帰町のための条件整備をするのだ”ということです。学校がないから戻れないということにならないように、学校もある、病院もある、買い物する場所もある、生活できる、というような基盤条件の一つとして学校があるということ。

だから、準備が整ったからといって子どもたちを呼び込むとか、住民帰還を促すということではない。富

岡町に戻りたいという家族のために学校はなければいけないということ、あくまでもその受け皿としての学校準備だということです。

このあたり、他の町村の場合と少し違いがあります。今まで避難先で開いていた学校を閉じて元のところに戻って開くというかたちではないということです。富岡町の場合、今まで開いていた「三春校」はそのまま残し、なおかつ富岡にもう1個つくったというかたちです。つまり、避難している子どもたちをこちらに連れてくるということはありませんでした。子どもたちが何人戻って来るとのことより、来たら受け入れられる、そのための条件整備という作業をしたということです。富岡町に住むという人、住んだ人たちのための学校という考え方です。

ですから、ほかの学校のようにスクールバスで避難先から運ぶとかいうことは、富岡町の場合一切ありません。」

(石井教育長)

2017年11月1日、富岡町教育委員会は「学校再開に向けて」の行動目標を発表した。富岡町教育振興計画検討委員会による5か月間の議論を踏まえた答申と、教育現場の意見を合わせて作成された“教育アクションプラン”だった。

その冒頭には、「富岡町でつくる新しい学校について」として次のように記されている。

...



石井賢一教育長

**富岡町でつくる新しい学校について**  
目指すのは、「コミュニティの拠点になる学校」です。

富岡町ではこれまで、そして避難の中にあっても

- 学校と地域が一体となり、まち全体で子どもを守り育てる
- 伝統文化を生かして、ふるさとを愛し、自らの力で未来を切り拓く人材を育成する

を教育推進の方針として掲げ、幼稚園から小学校、中学校へと切れ目のない一貫した教育を展開してきました。避難先(三春町)で再開している学校では、小規模校ながらもその良さを生かして、大いに成果を上げています。

来年の4月に町内で再開する新しい学校においても、これまでの方針を継続し、三春校の成果を引き継ぎます。

さらに今後は、町ぐるみで子どもを育てることをコンセプトの中心に置き「人がつながり 文化をつむぐ 多世代教育」を実現します。

毎日、子どもから高齢者まで様々な人が集い、互いに助け合い学び合う、いつでも、どこからでも、学校に来れば誰もが学びの場の参加者になれる、そんな学校づくりを進めていきます。

・・・

以下、「富岡町の学校概要」で富岡第一中学校校舎内に富岡町小学校・中学校の富岡校を2018年4月に開校すること、同三春校は2022年3月(2021年度末)まで維持されること、さらに「人がつながり 文化をつむぐ 多世代教育」のイメージ「具体的な取り組み(案)」として、「新しい学校」づくりの構想が示された。

「第一中学校という場所は、第一に立地条件から。地域住民の方たちが学校教育の中に関われるような仕組みをつくりたいと思いましたか

ら、あそこなら復興拠点地区として、復興住宅がたくさんできているしアパートも二つできているし、ということ。

また学校のかたちとしては、子どもたちを中心に考えて、子どもの数が少ない分を地域住民の協力でカバーしようと考えました。

従来、学校の中に大人が入るといのは大人が持っている経験とか知識を教えるゲストティーチャーとして入っていたわけですが、この考え方は違います。端的に言ってしまうと数合わせ。人が少ないから地域の大人も入って一緒に学びましょう、という考え方。大人が教えるというのではなく、子どもと大人と一緒に学ぶような仕組みにしたいと考えました。

大人の人たちが入っていても、大人だからといって子どもに教えるような思いは持たない。子どもの側が何かを聞いたがったら、そのときに

はどうぞ話をしてくださいという仕組みです。もちろん、自分が持っている趣味を通して子どもたちに教えたいという方がいるのですけれども、それはやめてくださいと。あくまで子どもが興味・関心を持ってきたら話をしてあげてください——というかたち。「人がつながり 文化をつむぐ 多世代教育」というコンセプトとしたこだわりの部分です。」

(石井教育長)

12月16日と17日の2日間、「富岡校」への入学・通学を考えている親子向けの見学会が開かれた。開校に向けての全面改築が突貫工事で進められていた富岡第一中学校の教室など一部が公開されたが、訪れたのは2日間で5世帯にとどまった。「三春校」からこちらに移るとい動きもなかった。



## 広報とみおか 桜通信 [抄]



三瓶 花夏さん (小浜)  
[平成27年1月号]

### 将来はまちづくりに携わりたい

富岡第一小学校4年生も残すところ約1週間となった金曜日。帰りの学活が行われている中、大地震に襲われ、先生の指示で机の下に潜りました。しかし地震の揺れが大きかったため、机ごと床を滑り動き、揺れが落ち着いた時には、自分の机があった場所とは大きく違い、何が何だか分からないという状況でした。

翌朝からの町外避難では、川内村内にある曾祖母宅を経て、親戚を頼り栃木県那須塩原市へ。平成23年4月から同市立共英小学校に通いました。平成23年9月、私たち一家は郡山市に移転し、富岡町立小学校三春校に転入しました。震災まで同じ富岡一小に通っていた同級生もいるなど、富岡に戻ったようなほっとした気持ちになり

ました。転入時、三春校では給食に仕出し弁当が出されていきました。それまで毎日違う献立で、温かいものが出てくるのが当たり前と思っていたため驚きましたが、その翌年の3学期に普通の給食となりました。久しぶりに温かい給食を食べたときは、ありがたさを実感しました。

小学校卒業後は、郡山市立の中学校に入学し、その後、町立中学校三春校に転入しました。部活等できることに限りはありましたが、生徒数が少ないため学習面で取り残されることもなく、中体連では陸上競技で生徒全員がレギュラー選手になれることなど、こうした環境だからできることとしてプラス思考で捉えています。

今年度後期、私は生徒会長を務めています。昨年の学習発表会では、生徒全員で故郷富岡町の歴史について調べたことを町での思い出を込めて発表しました。

私は間もなく中学校を卒業します。進学先は建築が学べる工業高校を目指しています。昨年から郡山市内に自宅を建てていますが、設計から建設まで目にする中、建築に興味を持つようになりました。将来、富岡で再び安全に生活できるようになったとき、新しいまちづくりに携わりたいと思っています。





学校再開を決めたのは、直前に行われた対象世帯への意向調査の結果だった。1世帯でも入学希望があれば再開するという町の方針だった。その1世帯が確認されたところからのスタートで、「学校再開に向けて」発表から5カ月での開校。現場は文字通り突貫作業での準備に追われた。

**中瀧宏昭 富岡第一中学校長** その後すぐに学校に行って教師の割り当てはどうか、ドタバタ決めたんですね。小学校と中学校と預かり保育も入るからということで、この先生はここにしようとか、1階は一般開放するから2階を子どもたちの教室にしようとかということを決めたのが11月21日でした。

**岩崎秀一 富岡第一小学校長** ただ、われわれはそれだけでは動けなかった。学校再開まで何をするか分からなかった。それで学校再開までにはこれだけの会議を最低でも開く必要がある、こういう協議会を持たなければ駄目ですということを自分で書き出して、それを月別にプレ内覧会は1月の中旬辺りにしましょう、この辺で備品入れておかななくては間に合いませんねという話を教育委員

会にしました。

それで、12月の16、17日に校舎見学会となってもまだ動きが見えなかった。さらに細かい予定表を作って入れたんです。町、教育委員会関係はこんなことをやる。それに伴ってわれわれは何をするか、施設関係、学校備品はどうするか——。これを作って教育委員会に提示をして、このとおりにやらないとちょっと間に合いませんと。

11月に方針が出て実際に動くのは12月。そこから開校まで、どういう段取りを踏んでやっていかないといけないかということを示して、動いていったんです。

三春校を作るときにも私はこれを作ったんです。それをベースにして、こちらから作って出していったんですね。ここは再開だから、この

辺はこうしてこうしてと逆算して作った。スケジュールですね。仮入学もしなければいけないでしょうか。

それで、校舎の平面図も何回も何回も変わって、おいおいやめてくれよと思いつつ、それに応じて教室の配置をしていった。

**中瀧** 細部の詰めについては、教育委員会を交えて話し合いをする部分と、校長4人や教頭4人で集まり、話し合いで決める部分とがあります。大きな施設面のこととか行政的な部分は教育委員会と協議し、実際に学校の教室配置はどうするとか、指導上こういうのが必要だとか、備品はこういうのが必要だとか、本当に学校というものを始めるに必要な物とか時間とか場所とか、そういったものを学校側では詰めていったと



小学校教室



小学校教室



いうところです。

学校の中でどんなものが必要か、例えばわれわれは授業でこういうものが必要だ、そのためには教室をこんなふうに配置したいというのが当然あります。そういった教育を行う環境づくりは基本的にわれわれが詰めていったということです。

その際に、岩崎校長先生が作ってくださったタイムスケジュールが、行政でやっていることと学校でやっていることの擦り合わせができる一覧表として大変役に立ったということだと思います。

岩崎 懐かしいですね。備品リスト、これを全部洗い出して。国語はこんなに必要だとか。

中潟 本当にもう逐一、全て。

岩崎 2月18日の説明会。このときに運動着の注文書も取りましたし、制服も注文を取りましたね。

中潟 そうですね。この日には転入学を決めているような子どもたち、保護者の方に一緒に来ていただいて、その場でジャージの購入とか制服の採寸も行わせていただいています。



中学校教室

岩崎 これでだいたい決定したんですね。

中潟 これで決定ですね。

岩崎 そうしたら今度は、3月2日になって学校再開セレモニーをやるという話になりました。4月6日に富岡の学校で、三春校の子どもたちも全部呼んでやるぞとなって、その実施計画を作って提示しましたね。

中潟 最初は真面目に作ったのですが、こんなに格式張って学校再開セレモニーをやるつもりはない、もっと気楽にみんなでお祝いをするということ強く出したいということで、ちょっとした寸劇を加えてみました。

岩崎 名前が「メモリアルドラマ」という。



中学校教室

中潟 そういうふうになりました。

岩崎 セレモニーはドラマをやってあいさつやって終わりという。

中潟 あいさつも町長だけでいいからと。

岩崎 そうですね。「それでいいんだ」と言うので「いいんですね」と言ってやりましたけれどね。

中潟 「えー!?!」なんて、みんなびっくりしていましたが。

岩崎 「おおきなかぶ」という劇をやって、これは笑いを取るような劇でしたよね。みんなで元気にできたから良かったですけれども。

中潟 一緒に頑張ろう!という掛け声でスタートして。



## 広報とみおか 桜通信 [抄]



深谷 結衣さん (深谷)

[平成28年12月号]

つながりを大事に、  
一歩ずつ前に進んで  
いきたい

被災翌朝、町外避難のため家族と共に町を出て、川内村の知人宅を経て避難所となっていた田村高校の体育館に身を寄せました。自宅を離れる時、本を何冊か持って出たおかげで何もできず身動きが取れない時間をやり過ごすことができました。

私たち一家は、田村高校から三春町内の避難所や応急仮設住宅を経て、現在は郡山市内で生活しています。そのため小学4年の新学期からは三春町立沢石小学校に転入しました。その後、富岡町立の学校が開校したため、5年生からは富岡第一小学校三春校に通いました。

中学進学にあたり、他の市町村立学校に入学できることは知っていましたが、富岡町に生まれた者として、せつ

かく開かれた町立学校に通うのは当然と思い、富岡第一中学校三春校に進みました。

学校は生徒数が少なく規模が小さいため部活動などに制約はありますが、少人数制で充実した学習環境にあると思います。

中学校入学後、英語が好きになり熱心に取り組んでいますが、少人数のため内容の濃い授業を受けることができています。英語検定にも挑戦しており、2年生のときに英検3級を取得。先月は英検準2級の二次試験を受け、合格しました。

現在、私は生徒会長を務めています。あまり人前に出るのが得意ではありませんが、思い切って自ら手を挙げました。10月末に行われた学習発表会では、実行委員長として全体の運営にあたりました。また、総合的学習では、「つなぐ」をテーマに故郷についての情報発信に取り組みました。その中で、今年1月に誕生した町公式マスコットキャラクター「とみっぴー」について紹介するビデオを制作し、企画立案、撮影から編集まで行いました。

中学校生活も残すところ約4ヵ月となり、間もなく高校受験を迎えます。当面、故郷を離れた生活は続きますが、将来は社会の役に立つ大人になれるよう、一歩ずつ前に進んでいきたいと思っています。

## 迎えた開校当日——子どもたちを歓迎する人波

全町避難でやむなく閉じられていた学校が開かれるのだから、再開には違いない。とはいえ、前と同じに開かれるのではない。前とは異なる新しいかたちで開かれるのだから、開校と呼ぶのがしっくり来る。

その日、2018年4月6日、富岡町立小中学校「富岡校」の再開セレモニーが行われた。この時点での「富岡校」の児童生徒数は17人(小学校13名・中学校4名)、同じく「三春校」26人(幼稚園4名・小学校12名・中学校10名)、合計43人だった。

**中潟** 教育長が町の人たちをその道路に1000人集めて、1000人で子どもたち全員を迎えるんだと言って。  
**岩崎** すごかったです、あれは感動しました。私も歩いてきてもう涙が出そうになりましたもん。こんなにみんなが歓迎してくれているんだと。

**中潟** 作業員の方だったり企業の方



再開の日・出迎えの人々



復興関連企業の人々も総出

だったり、もちろん戻っていらっしゃる地元の方々だったり、本当に大勢の方がその道路のところにずーっと並んでくださって、「お帰りなさい」とか「再開おめでとう」というプラカードも一緒に出してくれて、子どもたちを迎えてくださいま

した。

その前に学びの森で、富岡校の子どもたちと三春校の子どもたちを初めて対面させて——。

**岩崎** そうでした、一回学びの森に行けと言われて、そこでとにかく集まって、わざわざバスに乗ってここまで来て——。

**中潟** 出迎えていただいたときの様子が写真にあります、皆さんがダーッと並んで！

**岩崎** こんな感じで学校再開ですね。よくやりましたね。よく間に合いましたね。

**中潟** 学校の施設面を整備された方とか工事関係者の方とかもたくさんいらっちゃって、「工事をやっているときは誰もいない学校だったけれども、こうやって子どもたちが入って子どもたちの声が響く校舎になったので本当にうれしいです」とおっしゃってくださいました。



## 広報とみおか 桜通信 [抄]



遠藤 雅也さん (下千里)  
[平成29年3月号]

### 双葉郡生徒会連合での経験を将来の糧に

郡山市に避難後の平成23年4月、小学3年生から郡山市立永盛小学校に通い始めました。友達もできましたが、クラスに馴染めず登校したくないともありました。1学期の終わり頃、富岡町立小中学校の三春校が設置され、同校に移る同級生がいることを知り、2学期の途中から転入しました。中学への進学は、郡山市立の中学校に入学もできましたが、義務教育のうちは故郷でとの思いが強く、富岡第二中学校三春校に入学しました。三春校には自宅近くからスクールバスで片道約1時間かかり、はじめの頃は眠くなってしまうこともありました。今では読書などに使える有意義な時間になっています。

中学3年生では前期は生徒会長、後期は副会長を務めています。今年度、県立ふたば未来学園高校と双葉郡内各中学校の生徒会代表がお互いの考えや思いを共有するなどの活動を行う「双葉郡生徒会連合」が発足し、生徒会活動の一環として参加しました。

その一環で、昨年7月に発生した九州北部豪雨への募金を行うことになりました。当初、募金は被災地に送る計画でしたが、直接届けようということになり、私と未来学園生の2名が代表として現地に向かいました。最も被害が大きかった福岡県朝倉市杷木地区を訪れ、山あいの集落が土砂に覆われ一面が茶色になっている様子には言葉を失いました。また、杷木中学校の生徒会役員と交流し、互いの被災や復旧復興の状況を伝え合いました。

間もなく中学校を卒業して高校生になります。自動車に興味があり、工業高校を目指そうと考えましたが、両親からのアドバイスもあり、自宅から近く、幅広いカリキュラムがある高校を受験し、合格しました。同校は生徒数1000人を超えるマンモス校で、順応できるかという不安はありますが、将来の自分探しと故郷復興に少しでも役に立てる大人になれるよう、新しい一歩を踏み出したいと思います。



## 富岡町だからできる教育をするということ

岩崎 大騒ぎしながらでしたが、やはり学校を開いて良かったです。

理由はいくつかあるのですが、ここに学校を再開したことを、われわれ教職員以上に地域の方が喜んでくださいましたね。やっと子どもの姿が見える、声が聞こえるって。だから、やはり開いて良かったなど。苦労した甲斐はあったかなという気はしましたね。

あとは、ここに来て思ったのは地域の方々が優しいです。学校に対して協力的です。学校の子どもの数が少ない、先生の数が少ないと言うと、じゃあ、私たちに何かできることがありますかとやって来て、いろいろなことを支援してくれましたから。そのことによって子どもたちはいろいろな大人と接することができて、いろいろなことを学ぶことができますし、教室の中だけでは学べないことをたくさん学んでいるから、その子どもらは幸せかなという気はします。

中潟 私は須賀川市の出身なのですが、自分の中ではもう、震災後の原発事故も含めて、ある程度終息したという感じを、実は持っていました。

しかし、富岡一中の校長として2017年度着任という辞令をいただいて富岡町にあいさつに伺ったときに、町の状況を目の当たりにし、その後双葉町や大熊町の状況も自分の目で見るにつけ、原発事故の復興というものはまだまだ道半ばでこれからが本当に正念場、富岡町の再開で終わりではなくて、そこからのゼロからのスタートなのか、マイナスからのスタートなのか、本当にいろいろなものと闘いながら町が復興していくんだなということ、初めて実感させられたんです。

その後、富岡町のいろいろな会議

にも出席させていただく中で、町の方々の学校にかける期待というか、本当に大きいということが分かりました。皆さん、子どもたちの姿を見たり声を聞いたりすることが本当に尊いものだという思いです。イベントでもない限り子どもの姿はほとんどない町なので、若い人たちや子どもたちが集まってくるような場所であってほしいという期待感、願いが本当に強かったんですね。そういった中で、学校は地域のコミュニティの中心になっているものだとすることを、あらためて実感させていただきました。



富岡校入学式・再開セレモニー





岩崎校長先生がおっしゃったように、人々が本当に温かい目で、教職員も子どもたちも見守ってくれています。そういった意味ではこちらのほうが逆に感謝しています。学校で何か活動でご協力いただけないかという呼び掛けにはすぐに50人60人の人が集まって、子どもたちと一緒に活動してくださいませ。子どもたちと一緒にやる姿は本当に楽しそうで、子どもたちももちろんそうですが、逆に学校が社会というものに与える影響の大きさをすごく実感させていただいています。

**岩崎** 答えはたった一つなんです。子どもが楽しいと思える学校。保護者からすると通わせて良かったなと思える学校。これを作っていけば富岡の学校の未来は絶対に明るいはずなんです。これはどこの学校でも同じです。それを1年2年のスパンで見えてしまうと苦しいので、やはり富岡町は地道に、5年10年のスパンで見えていくしかないんだろうなと思っています。

**中潟** 中学校ってどちらかというと教科ごとに先生方が違って、3年生



中潟宏昭 富一中校長(左)と岩崎秀一 富一小校長

のときは卒業後には進路実現という明確すぎる目標があります。そのためにはその授業というものをどうするかという、ある意味が感じがらめな計画の中で進んでいきます。でも、本当に子どもたちにとって大切なものは何か、ということに気付かせてくれるのがこの学校だと思うんです。中学生が小学生に対してどういう心遣いをすべきかとか、それを普段の自分の生活にどう生かしていくべきか。そういう人として本当に

大切なものを小学校と中学校が一緒になることで、中学生は小学生から教えてもらったり体験させてもらったりしている。これはもうほかの学校ではできない。

ですから今、この町ならではの教育をしっかりとやっていけば、子どもたちは自然と戻ってくる、人々が子どもたちと一緒に戻ってくるというのは実現できるんじゃないかなと思います。



## 広報とみおか 桜通信 [抄]



大井川 順子さん (新夜ノ森)  
[平成27年6月号]

### 新天地で家族元気に生活しています

震災時、私は美容室でお客様を送り出した後、夫は夜勤で出勤前、当時小学4年生の長男は浪江町内のスイミングスクールに出かけるところでした。揺れが落ち着くとすぐに夫は次男を幼稚園まで迎えに行き、間もなく無事に連れ帰りました。地震の発生がもう少し遅ければ、一家離散状態になっていたかもしれません。夫は家族や近所に住む両親の無事を確認した直後、職場である第一原発に向かいました。

翌朝、夫と連絡が取れないまま、私は子どもたちや両親と共に町を離れました。避難中、第一原発は爆発や火災などが相次ぎ、夫の無事が心配でしたが、子どもたちの安全を第一に考え、夫の実家がある地域を目指しました。

避難から数日後、夫と連絡が取れ、再び家族全員が揃うことができました。こちらでは親類の空き家を借りて生活していましたが、その後、群馬県太田市で母屋と離れがある物件に出会い、平成25年8月から入居して現在に至っています。

こちらの「海が無く、夏が暑い」という環境には戸惑いました。夏は猛暑を通り越し息苦しさを感ずるほどですが、子どもたちは平気なようで、元気に学校へ通い、野球クラブチームに所属して汗を流しています。

この地域は、群馬・栃木・埼玉の県境が入り組んで日常的に人が往来しているせいも、地域の皆さんは、すんなりと私たちを受け入れてくださいました。また、大手自動車メーカーの工場やその関連で働く南米からの外国人も多く、街中ではラテン系の言葉が飛び交い、ブラジル料理の店もあるなど、多民族・多国籍で不思議な地域です。

富岡町で美容室を開業して11年間、多くのお客様に可愛がっていただきました。突然の避難とはいえ、それまでのご愛顧に御礼も満足にできず申し訳なく思っています。避難後、店舗の再開も考えましたが、当面は子どもの成長を見守りながら専業主婦として生活しようと思っています。

### 3 「富岡高校」からの“負けじ魂”

2014(平成26)年10月17日、福島県教育委員会は2015年度県立高校の募集定員を発表、避難先各地に設けられていた双葉郡内5校(双葉・浪江・浪江津島・富岡・双葉翔陽)のサテライト校については募集停止とされた。

富岡高校は1950(昭和25)年に開校した全日制普通科の県立高校だったが、2006(平成18)年に設置学科の再編が実施され、単位制国際・スポーツ科によるトップアスリートや福祉のスペシャリストを養成する特設高校に生まれ変わった。Jヴィレッジ内に設置されたJFAアカデミー福島と連携した富岡一中・富岡高一貫教育によるビクトリープログラムなどを通して、サッカー、バドミントン、ゴルフそれぞれの分野で強豪校としての名を全国に馳せる。

しかし、現バドミントン日本代表の桃田賢斗、大堀彩両選手ら在学中の生徒たちは、大震災と原発事故による避難で分散を余儀なくされ、2017(平成29)年3月、最後の卒業生を送り出し、休校のやむなきに至る。だが生徒らはこの間も「富岡快拳！」の報を町民に届け、卒業後の活躍とも合わせて被災・避難にくじけぬ“富岡魂”を鼓舞し続ける――。

#### もう一度 富岡高校でサッカーをやりたい

元富岡高校男子サッカー部監督 (現・相馬農業高校飯館校教諭)  
佐藤 弘八さん

学校が再開したのが、5月の10日でしたが、大会の予定が入っていたので、4月25日にサッカー部の活動を十六沼で再開、同時に寮を提供してくれたホテル天竜閣への入寮も行いました。練習をやっているものかとか、放射線の影響はどれくらいあるのかとか、この環境で本当にやるべきなのかとか手探りの状態でした。サッカーのトレーニングをできるカリキュラムや移動用に使えるバスを準備していただき、富岡高校時代に近い環境を整備することができたのですが、最初は放射線の影響を考えて外にいる時間が2時間ぐらい。午前中の体育の授業でサッカーのトレーニングを行えるようにして、放課後はトレーニングする時間は設けませんでした。

震災後も富岡でサッカーをやりたいという思いが強くて戻って来てくれた子どもたちでしたが、やはり環境が変わって、食事や部屋割りなど十分に満足できるものではありませんでした。それでも何のために集まってきたのかということを言いながら、サッカーに取り組んでいました。

富岡高校のグラウンドは人工芝でしたから、練習後グラウンドにレーキを掛けたり、試合前にラインを引いたりといった、普通の高校で当たり前に行う作業が必要ありませんでした。そういった恵まれた環境に対して、震災前は当たり前に思っていたところがあり、遠征試合先でプレーがうまくいかないとグラウンドコンディションが悪いせいにすることもありました。震災後は練習環境に対しても感謝の心を持ちながら、何に対しても当たり前じゃないんだという気持ちが芽生え、プレーにも現れてくる部分がありました。

もっとも印象に残っているのは、震災が起きた年の全国高校サッカー選手権大会の県大会決勝で、0対2で尚志高校に負けたことです。その時の3年生たちは、選手としても人間としても高いレベルにありました。遠征で強化に取り組んでいた震災前の春休みも尚志高に勝ちたいという思いがありました。震災が起きて富岡高校はなかなか練習ができませんでした。尚志はトップリーグであるプレミアリーグという全国大



会に参加していました。我々富岡は、プリンスリーグという東北大会に参加していました。最終節で負けて3位になりましたが、それなりの自信を持って選手権大会に臨んで、なんとか県大会決勝まで行くことができました。生徒たちにつらい思いをさせた分、勝たせたい思いが強かったので決勝戦に負けて崩れ落ちる姿を見た時に、自分の力のなさを感じました。あの経験があったからこそ2年後に優勝できたのかなと思います。あの敗戦は今でも記憶に残る悔しい敗戦の1つです。

その震災の年に入学した生徒たちが3年生となった平成25年度に、2度目の全国高校サッカー選手権出場を果たしました。あの時は例年になく質の高い選手たちが入ってきたので、期待していました。彼らは2年間、先輩たちが尚志に負ける姿しか見ていませんでした。力では互角でしたが、3年生になった時のインターハイでも勝てませんでした。最



後の選手権大会では、もう相手が尚志というよりも、自分たちの力を発揮すればどんな相手にも勝てるというまで自信が持てるようになりました。優勝して当然の力はありましたが、その力を発揮した彼らが素晴らしかったです。津波で犠牲になった貝塚晃太のため、という思いもありました。貝塚はとても心の優しい子で、自宅にいる祖母の様子を見に行ってもそのまま津波に飲まれてしまいました。

その時の3年生は、入学当初から背負うものが違ったのですが、背負うものが大き過ぎるとつぶされてしまうことがあります。それよりも我々はなんでサッカーをやっているのか、なんで富岡高校じゃなきゃダメなのかという思いを持って試合に集中できたから、選手権大会全国大会出場を勝ち取れたのだと思います。震災で犠牲になったたくさんの人たちの思い、富岡町民の思いもありました。たくさんの方の応援をいただけたのも、町民の皆さんの思いを受け止めてプレーしているということが伝わったからだと思います。

富岡町に初めて行った時は、小さな町で夜になると電気はすぐ消えてしまうし、人通りも少ないし、寂しい町だなと思いました。当初は、言葉使いなど少し生意気なところがあるようなサッカー部の生徒があまり

快く思われなかったこともありました。それが、サッカーを通して頑張っている姿を見てもらうことで、すごく応援してもらえるようになりました。部の活動を始めてから3年目に県大会で優勝、全国大会に出場したのをきっかけに、町民の皆さんの見目が少し変わりました。我々のためにおじいさん、おばあさんが応援しに来てくれるのを見ると、頑張らなくてはいけないという思いが自然と湧きました。

富岡高校には、国際・スポーツ科の立ち上げの時から在籍していたので、夢のある高校だったと今も感じています。スポーツに限らず人間性も高められるカリキュラムでしたし、その中で関わったことは私自身にとって大変勉強になりました。いま私がサッカーに関わる中で富岡高校から学んだことはたくさんありますし、富岡高校にいたからこそいろ

んな人たちに巡り会えましたし、本当に人の可能性を引き出してくれる学校でした。

富岡町民からは、富高生を見ていて励みになるとよく言われましたが、我々としては避難して狭い仮設住宅で暮らしているお年寄りや、復興に向けて努力している人たちの姿を見たからこそ、たとえ富岡町出身ではなくても富岡町民や富岡高校のために何か出来ることはないかと強く思いました。とはいえ、我々に来ることはやはりサッカーでしたから、選手権大会全国大会や県大会決勝に出場して町民の皆さんが集まれる機会を作れたことがとてもうれしかったです。

今でも、もう一度富岡高校でサッカーをやりたいと思うぐらい、私は富岡町も町の人々も大好きです。



## 富岡町立富岡高校！

元富岡高校女子サッカー部監督（現・尚志高校教員）  
松本 克典さん

3月11日に震災が起きて、その夜は全員寮に泊まり、翌日全員で川内村に避難。さらにその日の夜のうちに、郡山北工業高校に避難しました。保護者と連絡を取り合い、最後の生徒を引き渡し終えたのが13日の朝でした。私も実家のある茨城県つくば

市に避難しましたが、その後、郡山北工業に事務局を立ち上げるということでつくば市から通勤しました。

サッカー、バドミントン、ゴルフの先生方と話を進めるに当たって、拠点となる練習場所をまず確保しようということになりました。バドミ



ントンは猪苗代町、サッカーとゴルフは福島市、そこに近い県立高校ということで、それぞれ猪苗代高校と福島北高校にサテライト校を受け入



れていただきました。

その年、女子は新入生含めて20名で新年度スタートの予定でしたが、新入生1人しか入学してきませんでした。在生も半数以上が転学、10人しか揃わない中で女子サッカー部の活動を再開せざるをえませんでした。そのため2011年は10人で戦うしかありませんでした(試合は7人以上で成立)。また、2012年6人の時は地元のクラブチームに所属させていただき戦いました。

福島北高サテライトで印象に残っているのは普段の練習です。メインの練習場所は十六沼でしたが、使えない時は福島北高のグラウンドの隅っこや校舎の周りを使って、基本的なメニューやランニングなど工夫して練習を行いました。十六沼も北高も専用の施設ではないので、富高の時のように思うように使用することはできませんでしたが、感謝の心を持ちながら活動に励んでいました。部員たちは、人数が揃わない、施設も専用ではないということが分かった上で在籍してくれた生徒たちだったので、同志という感覚がありました。

我々の活動はあくまでも部活動の一貫だった訳ですが、震災をきっかけに目的がより明確になり、学校の部活動というよりもすべてを共にする仲間という感じになりました。単独のチームとして、とにかく全国に出たいという思いを持ちながら練習に取り組んでいましたが、ようやく15人揃った2014年、単独チームとしての出場が最後となるその年に、高校女子選手権大会の全国大会へ出場できました。しかしその年の夏に富岡高校の休校が決定してしまいました。せっかくチームとしての形が戻ってきたところだったので非常に残念に思いました。富岡高校の休校もショックだったのですが、ふたば未来学園が単独でチームとして立ち上げるとなったこともショックでした。バドミントンのように、ふたば未来学園の子たちが富岡高校と同じ校舎でともに活動できると思ってい

たのですが、男子が広野で練習することになり、女子もそれにならうことになってしまいました。県としてはふたば未来学園を立ち上げたこともあり、男女ともに単独で活動させたかったのだと思います。

富岡高校について強く思うのは、夢があったということです。当時JFAの川淵三郎キャプテンが「夢があるから強くなる」という講演を富高でくださったり、子どもたちも「なでしこに入りたい」とか「日本代表に入りたい」とか本当に高いレベルだったし、桃田選手を始めとするバドミントンの選手たちも夢を持って毎日を過ごしていました。そういう子たちと一緒に他のコースの子も、夢を大事に活動している子が多かったです。その選手たちが結果を出すことで我々教師も刺激を受け、自然に頑張ろうと思える環境だったと思います。アカデミーはJFAが立ち上げたエリートプログラムで、富岡高校に在籍はしていますが練習はJヴィレッジで行っていました。練習は別々でしたが、同じサッカーを志すものとして、高いレベルを身近に感じることができました。

当時の青木淑子校長先生とは、よく富岡町立富岡高校と冗談で言っていたのですが、富岡町は本当に全面的に富岡高校を支援してくださいました。例えばバドミントンのビクトリープログラムも、猪苗代町に移ってからも富岡一中だからと支援し続けてくださっています。私たち女子サッカー部もことあるごとに広報で取り上げていただいたり、ラジオに呼んでいただいたり、サポートしてくださいました。そんな富岡町の町民の皆さんには、私たち女子サッカー部の活動を支えていただいたことへの感謝でいっぱいです。皆さんの応援があったからこそ、富岡高校として頑張ることができたと思います。

私たちはユニフォームでよくピンクを使っていましたが、町自慢の夜の森の桜をイメージしたものでした。毎年欠かさず花見をやったり、本当にいい町だったと思います。復興は、まだ思うように進んでいない部分はあると思いますが、応援していますので頑張ってください。



## 次の夢は「富岡高校」の復校！

青木 淑子さん (2018.10.30 談)

元県立富岡高等学校校長 (2006年に国際・スポーツ科に改編当時の校長)  
2017(平成29)年4月に郡山市から富岡町に移住

2004(平成16)年4月から2008(平成20)年3月まで、富岡高校の校長を務めましたが、赴任した年の11月に双葉地区教育構想が立ち上がりしました。双葉地区の教育レベルを上げるということと、Jヴィレッジの有効活用ということだと思いますが、日本サッカー協会とJヴィレッジと福島県が提携して、日本のサッカーをワールドカップで優勝させようという夢を実現させるため、Jヴィレッジを拠点としてエリート教育をしようということになりました。当時ワールドカップでフランスがいい成績を取りましたが、その理由は国がつくったINFという学校にあると言われていたからでした。

当時の日本代表監督だったトルシエ氏が、日本もサッカーが強くなるためには、小さい頃からサッカーの才能を持った子どもたちを、徹底的に教育していかななくてはいけないと勧めたんです。Jヴィレッジを視察して「こんなに素晴らしい施設があるじゃないか」となり、ここをフランスのINFのようなサッカーの拠点とするためには子どもたちを学校に通わせる必要がある。中学校は近くにある楡葉中と広野中、高校は富岡高校に通わせればいい、と日本サッカー協会が考えました。

福島県が双葉郡の教育のレベルアップを図ろうとしたのと、Jヴィレッジが施設を有効活用しようとしたのが合致して、双葉地区教育構想が立ち上がった訳です。これは当時の佐藤栄佐久知事の発案で、予算の確保から何もかも知事部局が前面に立って進めました。学校を変える場合、普通は教育庁を中心に、その計画は5年も6年も掛けてやっていますが、双葉地区教育構想の場

合は2004年11月に新聞発表、すぐ検討委員会が立ち上げられ、翌年に準備、2006年にスタートと、ものすごいスピードで進められました。

そんな富岡高校には、日本サッカー協会が選ぶアカデミーの子どもたちの他に、サッカー、バドミントン、ゴルフ、3つの競技に特化して生徒を募集することになりました。普通科だったところを国際・スポーツ科にしたわけですが、サッカー、バドミントン、ゴルフの世界的アスリートを育てるというだけでは地域のニーズと合わないので、世界的なアスリートを養成するスポーツコース、介護福祉士やスポーツトレーナーを目指す福祉健康コース、国際人を養成する国際コミュニケーションコースと、3つのコースを設けました。単位制の教科を選択して自分でカリキュラムを組むかたちですが、サッカーをやる子は朝から晩までサッカーをやっているという日もありました。

人事も県立高校としては異例で、ALTが英語とフランス語と3人いたり、バドミントンにはインドネシ



アのコーチが就いたりしました。

施設に関しては2005年に急ピッチで準備が進められ、サッカーは人工芝の校庭、バドミントンは公式試合ができる天井高のある体育館、福祉健康コースはトレーナー機器を完備したジム、介護福祉士になるための実技ができるベッドやお風呂のある実技棟、コミュニケーションコースは英語しか使わないというグローバルゲートウェイという擬似教室、ゴルフは新学科棟の上に打ちっ放しを、といった具合に驚くような施設を整備して新入生たちを迎えたのです。

開校式が始まった時は身震いを覚えました。皇族方もいらしてる中、式典の司会を普通科の生徒が行いました。地方の小さな県立高校であった富岡高校は、進学する子はほとんどいません。そんな学校の生徒が、世界的なレベルで行われる式典の司会・進行を見事に務めるのを目の当





たりにし、若者はいろいろな可能性を持っているのに大人が色眼鏡で見たり、偏差値で分けたりして、その子の可能性を摘んでいるのだと感じたのです。

2008年に私が退職する時、普通科の最後の生徒たちも卒業でしたから、常日頃から「私とみんなで一緒に卒業しようね」と言っていました。普通科の生徒たちが築いてきたものがあるから国際・スポーツ科ができるのであって、普通科の生徒たちが国際・スポーツ科の生徒のことを羨んだり、自分たちを卑下したり、卑屈になったりは嫌だと思ったからです。国際社会というのは、違いを認めるところから出発するのであって、国際人になって世界的アスリートになろうというスポーツ科の生徒が、普通科の生徒をバカにしたり蔑んだりする行動は見過ぎませんでした。

富高にいた4年間で印象的な出来事は、やはり国際・スポーツ科の1期生が入ってきたことです。どれくらい入学してくるか読めなかったし、科は開いたものの入学してこなかったらどうしようという心配もあったので、新入生を見た時はうれしかったです。そして、国際・スポーツ科生が入学してきた時には「俺たちもういらんいんじゃないの」とか「あいつらばっかり目立って俺たちは邪魔だねとか」などと言っていた普通科の生徒たちが堂々とした姿で卒業していったことも忘れられません。

富岡高校は、国際・スポーツ科となってもそれまでの校名を変えませんでした。校名を変えなかったからこそ、震災の中、富岡町民にとって町のシンボルとなり励みになりました。バドミントンの桃田選手など、トップアスリートに成長した選手たちが富岡高校出身としてメディアに登場すればみんなで喜ぶことができました。男子サッカー部が震災の翌々年に全国大会に出場した時も、町をあげて「富岡がんばれ！富岡がんばれ！」と応援できたのも、やは



今も校門前に掲げられる輝かしい歴史

り富岡高校だったからです。教育委員会の一部からは、校名を変えた方が良いのではという話もありましたが、私は絶対変えたくありませんでした。

国際・スポーツ科になった初めの年というのは、生徒数は少ないし活動後援会も整っていないのに、生徒たちが次々と全国大会へ出場して活動資金が足りなくなっていました。その時同窓会の人たちが、町中を一軒一軒回って寄付金を集めてくれました。それも富岡高校という校名でなかったらそうはならなかったのではと思います。当時の校長として、校名を変えなかったことは、ほめてもらってもいいんじゃないかなと思っています(笑)。

富岡高校には学区がなく、生徒は全国から集まっていました。人間の持っている可能性のようなものを最大限伸ばすという意味では、すごい学校だったと思います。休校となってしまいましたが、私は復校するべきだと思っています。震災が起きてからも富岡高校の入学者は減っていませんでした。定員の半数に満たないことが3年続けば、本校は分校に、分校は閉校になるという県の規則があります。それで川内村にあった分校は閉校になりました。でも富岡には震災後も60人ぐらいいたので、なぜ休校にするのかと思いました。双葉郡の高校を平等に扱った

のだと思いますが、県立高校の規格から外れた特別な富岡高校をつくっておきながら、休校にする時はなぜ他と一緒にしたのかという思いは残ります。

富岡高校、双葉高校、双葉翔陽高校と3つの高校が休校となり、新たにふたば未来学園高校が開校しました。せっかくつくった高校なのだから、富岡高校の精神をしっかりと受け継いで欲しいとは願っていますが、広野に1つの高校をつくったから他の高校を閉校していいかという、それはまた違う問題だと思います。富岡高校は、富岡町にぜひとも必要な学校です。学校がないと若者がいなくなってしまう。たとえ少ない人数でも町内に学校があって、通ってくる若者がいるということは、富岡町にとって不可欠な要素だと思います。小中学校が開校しましたから、次は高校だと思います。富岡でしか学ぶことができないような高校が、できればいいのかなと思います。

私は2017年の4月に、郡山市から移住して富岡町民となりました。これからも町民のみなさんと一緒に、この町のことを考えていきたいと思っています。長く住んでいる町民からすると、生まれ育った人によそから来た人というふうに分けて考えるのだと思いますが、これからの富岡町は一緒に町をつくってこうと



考える人たちが集わないといけないと思います。人の心はなかなか変えられないかもしれませんが、新しい町民と手を取り合うことにあまり抵抗感を持たないで欲しいです。

富岡の町は空が高く、風が気持ちよくて、海をいつでも見られて、

それだけでもいいところだと思います。町には私にとって大事な人がたくさんいます。これからつくられていく、出来上がっていない町に住むことに、とても面白さを感じています。ここには、自分にも何か出来るんじゃないかと思える“わくわく感”

があります。まだまだ不便なことがたくさんあるし、解決しなければならぬ問題も多いですが、そういう中にいるからこそ、何か、自分が出ることに向き合えるのだと感じています。



## 広報とみおか 桜通信 [抄]



渡邊 奈穂美さん (上郡)

[平成29年4月号]

### 人と自然が共生する 新しい故郷づくりに 向けて

富岡町が地震と津波で大きな被害を受けたことを知ったのは、震災翌朝の避難指示により町を離れてからテレビで知りました。震災発生時は、友人と町内のショッピングセンターにいました。大地震が発生し、大津波警報が出され、すぐに王塚方面に避難したため、海岸付近で何が起きているのか全く分かりませんでした。

震災翌日、家族と共に町を出て、大熊町内に住む母方の祖父母を探しながら、福島県内を転々としました。その後、親類を頼って会津若松市へ向かい、そこで生活を始めました。同市には大熊町の皆さんが多く避難しており、富岡町民は珍しい存在のようでした。

避難後、私は会津若松市立の中学校に転入し、県立

会津高校に進みました。そうした中、富岡町などが警戒区域に設定され、テレビや新聞などで無人となった町の様子が頻りに報道されるようになりました。私は動物によって家屋が荒らされる様子を見て、動物と人間の関わりに関心を持ち、北里大学獣医学部動物資源科学科を受験し、入学しました。

大学最初の1年間は神奈川県相模原市でキャンパスライフを送りました。東京都心から数十キロ離れているとはいえ、富岡町や会津若松市に比べると人が多く、混雑しているため雰囲気は馴染めませんでした。2年生からは青森県十和田市にあるキャンパスでの授業となり、動物や自然を相手に勉強できる充実した日々を送ることができています。

大学では、動物生命の誕生から人と動物、食と健康の関係まで横断的に勉強しています。そのため、原発事故後に故郷が抱えた大きな問題の一つとなっている、家畜の野生化や野生動物との交雑、その生態による被害について、より深く興味を持つようになりました。

故郷への帰還が始まり、人と自然の共生の果たす役割も大きくなっています。将来は大学で勉強したことを生かして、新しい故郷づくりに関わりたいと思っています。